The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	クシャン朝の仏教彫刻に関する研究
Author(s)	高, 廷銀
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49103
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【40】

氏　　名	高（コウ）　廷銀（ジョンウン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２１７０３　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**クシャン朝の仏教彫刻に関する研究**
論文審査委員	（主査） 准教授　藤岡　穣 （副査） 教　授　奥平　俊六　　教　授　泉　万里

論　文　内　容　の　要　旨

序論としての第Ⅰ章に続き、第Ⅱ章は、パキスタンのなかでも最も歴史があり、ガンダーラ彫刻の宝庫として知られるラホール博物館所蔵の 233 点に及ぶガンダーラ彫刻に関する調査研究である。単独像については像主別に詳細に様式を分析したうえで、その結果をもとに形式編年を試み、本生・仏伝浮彫については主題別に画面構成や図像的特徴を考察し、説法図及び降魔図などに表された仏陀像が次第に独尊像に発展した可能性を導き出す。また、マトゥラーを始めとするインドの仏伝浮彫との比較から、主題がきわめて多岐にわたるガンダーラの仏伝浮彫に対して、インドのそれが聖地巡礼と関わり、主題が集約的であることを指摘する。

第Ⅲ章は、ペシャワール盆地北方に集中する仏教寺院遺跡の一つ、シクリ遺跡出土のガンダーラ彫刻のうち、インド・チャンディカル博物館所蔵作品の調査研究と、ラホール博物館所蔵の仏伝浮彫を中心としたガンダーラ仏伝浮彫の構成や表現形式に関する比較研究である。単独像の様式分析から、シクリ出土の彫刻をおよそ２～３世紀頃の制作と位置付け、仏伝浮彫については、成道以降の教化活動を中心にしたものと、燃灯仏授記と成道以前及び涅槃を主題とする伝記的性格が強いものと、構成上は２系統に分類されることを指摘する。

第Ⅳ章では、第Ⅱ章、第Ⅲ章での考察の結果をふまえ、ガンダーラとマトゥラーの仏伝浮彫の交流関係について考察する。ストゥーパの基壇や胴部を飾ったガンダーラの仏伝浮彫は、仏伝や涅槃経典に基づく主題が１～２場面ずつ連続する小画面に表される。一方、マトゥラーの仏伝浮彫は、ガンダーラと同様に基壇に表された作例の他、欄楯柱、塔門横木などにも施されたとみられる。また、ガンダーラの仏伝の主題が 100 以上にわたり、仏伝や涅槃経典に取材しているのに対して、マトゥラーでは、図像にガンダーラからの影響が認められるものの、主題は誕生、降魔成道、初転法輪、涅槃の４大聖地を表した四相が中心であり、それが聖地巡礼と密接に関わることに加え、四相を一画面に表す画面形式やナーガを表す図像などに独自性が認められることを指摘する。

以上、本論は、ラホール博物館、チャンディカル博物館のガンダーラ彫刻の調査研究を基盤としながら、マトゥラーを始めとするインド彫刻にも考察を及ぼし、特にクシャン朝における仏伝浮彫の特色を多角的に論究したものである。

論文審査の結果の要旨

クシャン朝のガンダーラとマトゥラーにおける仏教美術の興隆、就中仏像の誕生は、以降、仏教美術が飛躍的に発展する礎を築いた。本論文は、そうした仏教美術史上きわめて重要なクシャン朝の仏教彫刻について、パキスタン・ラホール博物館所蔵のガンダーラ彫刻、ラホール博物館とインド・チャンディカル博物館に分蔵されるシクリ遺跡出土のガンダーラ彫刻の調査研究に基づきながら、それらガンダーラ彫刻とマトゥラーを始めとするインド彫刻の双方の特徴に検討を加え、さらに両者の交流関係を考察したものである。本文は 400 字詰原稿用紙に換算して約 300 枚、これに 131 枚の図版が付されている。

本論文の最大の特徴は、詳細な作品調査を基盤としている点である。ラホール博物館とチャンディカル博物館の 500 点以上にのぼる作品調査とカタログの作成は、それ自体が仏教美術史の研究に大きな貢献をもたらすが、さらに種別に詳細な様式検討を加え、A. フーシェ以来の研究を改めて検証し、より綿密かつ実証的に形式編年を試みたことは高く評価される。

本論文は、そうした基礎的な作業を経て、ガンダーラ彫刻のなかでも特に仏伝浮彫に焦点をしぼる。ストゥーパの基壇や胴部を飾っていたガンダーラの仏伝浮彫は、本来は複数のパネルを繋ぎ合わせて連続する画面を形成していたが、現在はほとんどが解体された状態で伝存している。そこで、ガンダーラの仏伝構成のプログラムの解明に向け、数少ないながら当初の配置が復元可能な作例に着目し、燃灯仏授記から誕生、青年期から成道までの仏伝と涅槃によって構成される一群と、主に成道後の教化活動によって構成される例が存することを指摘する。また、それを経典と対照することにより、前者については仏伝テキストのなかでも『修行本起経』と『大般涅槃経』に依拠している可能性を導きだした。

また、ガンダーラだけではなく、マトゥラーを始めとするインドの仏伝浮彫にも目を広げ、クシャン朝全体を見渡して仏伝浮彫の構成や機能を比較検討した点は、従来の研究ではやや欠けていた視点であり、本論文の独自性を示している。そして、その結果、仏伝テキストに基づくガンダーラの仏伝浮彫に対して、マトゥラーを始めとするインドの仏伝浮彫が聖地巡礼と関わり、四大聖地での出来事を中心とするなど、地域による構成の異同とその影響関係の考察の必要性が主張される。

本論文は、作品の調査報告のなかで、必ずしも論旨上は必要とされないデータの紹介に紙数を割くなど、構成にまとまりを欠く嫌いがあり、考察の結果が概して従来の研究を追認するものとなり、新知見の提示という点では物足りなさも残る。とは言え、現地調査に基づく作品データの紹介と検討、ガンダーラのみならずインドにも目を向けた仏伝浮彫に関する考察は、仏像の起源問題も含めたクシャン朝の仏教彫刻研究に新たな可能性を開くものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。